

作業療法士における「働きがい」に影響する要因について

氏 名 宮尾 京介

指導教員 鳥取部 真己

要旨：

本研究の対象である作業療法士について、日本作業療法士協会では、作業療法の定義を 2018 年に改定し、その経緯として、作業療法の対象が、個人の枠を超え、地域や社会などの集団へも拡大した事など、作業療法士を取り巻く社会背景を説明している。このように作業療法士の社会的需要はより一層の高まりをみせるが、少子化に伴う人材不足は本業界においても重要課題である。

医療組織における優秀な人材の確保や、人材育成、組織への定着化を図るには、職場における働きがいの問題に関連したマネジメントが大切であるとされている。

そこで、本研究では「働きがい」がある状態をワーク・エンゲイジメントが高い状態と定義し、作業療法士のワーク・エンゲイジメントに影響する要因について横断的に調査した。影響する要因には、先行研究レビューとインタビュー調査を実施し、10 の要因を抽出し、既存の尺度を用いて調査した。

調査対象は、福岡県に所在する一般病院（13 施設）に勤務する作業療法士であり、90 名から回答が得られた。調査データは、因子分析にて 9 つの独立変数（人間関係、裁量/自律性、上司の目標達成行動、上司の配慮行動、報酬、顧客（患者）評価、職務意義、自己効力感、医療における PIF）を構成し、重回帰分析ならびにパス解析にて仮説を検証した。

結果、作業療法士のワーク・エンゲイジメントには、医療における PIF、職務意義、自己効力感が有意に影響した。また、パス解析にて医療における PIF には「患者からの評価」と「職務意義」が、自己効力感には「患者からの評価」と「仕事の裁量/自律性」が有意に影響していた。つまり、間接効果をもつ「患者からの評価」、「職務意義」、「仕事の裁量/自律性」を効果的にマネジメントすることで、作業療法士のワーク・エンゲイジメントを高めることが期待される。したがって、本研究ではこれらの結果に基づき、作業療法士のワーク・エンゲイジメントを高める実践的な提言を考察する。

